

半年かけ題材練り上げ

弁論・菊地寧々さん(水海道一高)

弁論部門には、5月に開かれた県大会で優勝、準優勝に輝いた伝統校2校の2人が出場する。県立水海道一高の菊地寧々さん(3年)は、昨年の総文祭で先輩が優良賞(全国10位)に輝くなど、ここ数年連続して上位入賞を果たしている同校の伝統の重みを背負う。弁論は7分間の発表。自分自身の思いを言葉に込める。



= 3 =

「幼い頃から変な子だった」と話す菊地さん。他の人が当たり前だと思っていたこと、弁論に興味を抱き始めたのは小学6年生の時。旧石下町(現常総市)の青少年の主張大会に先生の勧めで出場

したのがきっかけ。中学生では人前で発表する機会は少なかったが、生徒会活動に取り組み、同高では入学時の部活動説明会で「やってみよう」とすぐ入部を決めたという。

「大会の順位より、とにかく人に話を聞いてもらうことが好き。全国大会に選ばれ、本

当に自分なのか信じられなかった」と驚く。発表する原稿は年に2本と決めている。小さい頃から思っていたこと、出掛けた先で思い浮かんだ題材を半年かけて練り上げる。写真撮っておいて、自宅に帰って目で見た記憶と衝撃をメモに取り、あとで文章化する。

3年間の締めくくりに大会。「みんな真面目でアットホームな雰囲気。自分の意見をさらに伸ばせたい、他の人の意見で自分を高めることができた。弁論に出合えて自分が大きく変わった」と仲間

感謝する。今回の発表内容は、「『女は駄目』が自分のコンプレックスになっていた。男と女で見分けられてしまつのは嫌で、『できることはやってみたい』とずっと思っていたこと」と話す。

福島大会にはほかの部員7人も足を運ぶ。就任6年目の渡邊克也教諭(47)は「集大成として悔いの残らない発表をしてほしい」と見守る。(高畠和弘)



弁論部門に出場する県立水海道一高の菊地寧々さん(左)と弁論部員＝常総市水海道亀岡町の同校